

図書館だより

～ 今月のおすすめ本 ～



83歳の女子高生球児

上中別府子工

15歳で終戦、74歳で夫と死別、76歳で中学校に入学、79歳で高校生になり、82歳で野球部に入部。現在84歳の子工さんは、金髪や不登校の仲間たちを明るい性格と頑張りで元気付けています。すがすがしい子工さんの活躍を読むと勇気が湧きます。(東)

お嬢さん、空を飛ぶ 草創期の飛行機を巡る物語 松村由利子



大正時代、アメリカから女性パイロット、キャサリン・スティンソンが来日。その曲芸飛行は、多くの日本人を熱狂させたそうです。この事実を知った著者が、空を飛ぶことに憧れ、実現させた、当時の日本の女性たちの人生を追いました。(西)

▶詳しくは、東図書館(☎62・0190) 西図書館(☎75・5406)へ。



ドクターTのひとりごと

その⑨「年齢を重ねると時間が過ぎるのが早く感じるのはなぜ？」

ほとんどの大人は小学生の6年間は長かったと感じ、年齢を重ねるほど月日の経過が早くなるように感じます。なぜ時間の流れが年齢を重ねると早く感じるのでしょうか？

「時間の心理的長さは年齢に反比例する」と述べる学者によれば、10歳の1年間は30歳の1年間の3倍に相当し、幼いときほど時間の経過が長く感じられるとのこと。この考え方には私は多少は賛成しますが、歳が同じなら皆が同じに感じるとは思えません。私は脳に刺激がある時間帯ほど、時間の経過を長く感じるのではないかと考えています。

まさに子どもの頃は、見るもの聞くもの全てが新鮮であり脳が酷使されることが多く、時間の経過が長いと感じるのだと考えます。大人になると経験によって処理できることが多くなり、その分、脳への刺激が弱く時間が短いと感じる。

私は年齢を重ねても「時間が長く感じる」生活をしたいたと思っています。いずれにしても、充実した日々を過ごすことが大事であり、そうした時期は長く感じると思っています。

皆さんはどのように考えられるでしょうか？

くらしの豆知識

～ 親にナイショで利用したクレジットカードで大惨事!? ～

あなたのご家庭でこんなことはありませんでしたか？



現金を持っていなくても、ゲーム機やスマートフォンにカード番号を入力さえすれば、子どもでも有料のアイテムが購入でき、知らない間に高額な請求書が届いたという相談があります。

このような被害を防ぐには、クレジットカードを勝手に使われないよう管理することが大切です。また、子どもの利用しているゲーム機やゲームの仕組みを理解すること、クレジットカードの正しい知識を子どもに教えることも大事なポイントです。

▶詳しくは、市民相談課(☎66・1006)へ。

まいづる花図鑑 90

【カンアオイ】 (ウマノスズクサ科) 見ごろ 11～3月頃



山地の樹木の下に生える常緑の多年草。茎は地を這い、節から2～3枚の葉が生える。葉は、長さ6～10mm、幅4～7mmの広卵形か心臟形で白斑が入るものもある。冬、茎の先に直径2mm程で先端が3裂した暗紫色の筒状花が開くが、多くは落葉の下か半ば土に埋もれている。

名前の由来は、葉が冬でも枯れずに緑色で葉の形が別種のアオイに似ていることから。春の女神と呼ばれるギフチョウの幼虫はこの葉を食べる。

【協力】 瓜生勝朗 市文化財保護委員(植物分野)

「引き揚げ」の記憶を次世代へ

引揚記念館に展示・保管している海外からの引き揚げやシベリア抑留などに関する約1万2千点の資料の中から、今回は「トランペット」を紹介します。

シベリア抑留の収容所は、1,800か所以上あったといわれています。収容所によって環境は大きく異なり、演劇や音楽などの芸術活動が許された収容所もありました。

当館に展示されているトランペットは日本人抑留者で結成された「新星」という楽劇団で演奏されていたものです。

楽劇団「新星」は、ライチ八収容所で昭和21年の1月に結成され、音楽の演奏をはじめ歌や踊りなどもこなす芸能集団として、延べ50人くらいの団員が在籍していました。また、団員の中には戦前に日活の俳優として活躍した人や昭和を代表する歌手である青木光一さんもいました。

「新星」にはトランペット以外にもサクソホンやクラリネットなど、さまざまな管楽器のある管楽団でもありました。これらの楽器はソ連側が用意したものでしたが、穴が開いて空気が漏れるなど非常に粗末なもので、楽劇団のスタートはこれらの楽器の



▲トランペット

修理からでした。展示されているトランペットもあちこちにへこみがあり、吹き出し口のあたりなどに修理された跡があります。

粗末な楽器でしたが、心を込めた精一杯の演奏は、寒さと飢えと重労働で疲労困憊した日本人抑留者たちにとって、心の慰めと生きる希望となりました。それは、観衆だけではなく演奏する側にとってもいえることで、「『新星』があったお蔭で生きて帰ることができた」と当時の団員が証言しています。

トランペットの演奏や「新星」の活動は、過酷な環境の中で押しつぶされそうな精神を支え、先行きの見えない抑留生活の中に一筋の光を抑留者に与えたのです。

▶詳しくは、引揚記念館(☎68・0836)へ。

広げよう人権の輪 「人として」～ 認知症患者さんの手記から～

私は認知症です。この病気は脳の病気で、「忘れていく病気」です。ある日、家族から「物忘れが多い」と言われるようになったため医療機関で受診したところ、認知症との診断を受けました。物忘れが多いのは自覚していましたが、実際に診断を受けたときは、「これから自分が自分でなくなるのか」と思うと本当にショックでした。

本やテレビで認知症に関するものを読んだり見たりすると、すべて「辛い」「悲しい」「しんどい」…と大変なことばかり出てきます。「ただの病気」と思う一方で、「人生が終わるようなものなのか」と自問自答を繰り返しました。そして、「迷惑をかけたらどうしよう」という気持ちがだんだん大きくなり、家から出ることも、地域の集まりにも行くこともなくなりました。

心配した地域の方が訪ねて来られたとき、思い切って「認知症になりました。これからは地域の行事に参加できません」と話すと、「ただの病気だ。関係ない。これまでどおり出てきて、いろいろ教えてほしい」と言われました。その一言がとても嬉しかったです。

認知症になっても、できることはたくさんあります。認知症はただの病気。それを皆さんに分かってほしい。今までどおり接していただけることが何よりも嬉しいのです。

今も「忘れたこと」を家族と笑いながら過ごし、地域の方も私に変わらず接してくれます。

これからの不安はありますが、今、私は幸せです。

この手記は、認知症と診断されたAさんが書かれたものです。認知症だからといってAさんの人格に変わりはありません。Aさんの人生や誇りとしてきた仕事、そして人間らしい感情は、今でもAさんの心の中に息づいているのです。

Aさんは家族に支えられ、地域の人に受け入れられ、頼りにされていることによって自信を取り戻し、病気と向き合っていくとされています。認知症になっても暮らしやすくやさしい社会を築いていくためには、この病気についての正しい理解と地域や周りの人々の協力がなにより必要なのです。

《人権啓発推進室》